

## 黙示録2章1-7節 「初めの愛」

### 1A 教会の真ん中におられる方 1

### 2A 労苦と忍耐 2-3

#### 1B 偽使徒への対峙 2

#### 2B 疲れ果てない忍耐 3

### 3A 初めの愛 4-6

#### 1B 優先順位のずれ 4

#### 2B 悔い改め 5

#### 3B ニコライ派への憎しみ 6

### 4A 勝利ある者 7

## 本文

黙示録 2 章を開いてください、私たちの聖書通読の学びは黙示録 1 章まで来ていました。今日は、2 章全体を見ていきたいと思います。午前礼拝で、1 節から 7 節まで、午後礼拝で、残りの 8 節から 29 節までを見ていきたいと思います。それでは、2 章 1-7 節全体を、まずは読んでみたいと思います。(朗読)

私たちは前回、ヨハネに対して、栄光に輝く姿で、よみがえられたイエスが現れたところを見ました。そして、そのよみがえられ、今も生きている方が、七つの教会に対して、一つ一つ、御使いを介しての使信を語られます。それは、教会に対する正しい裁きです。裁きといっても、罪に定めるためではなく、清められるためであり、主が来られる時に、キリストの花嫁として整えられるためです(エペ 5:26-27 参照)。

主は、ご自身が戻ってこられる時に、まず神の家から裁かれます。「I ペテ 4:17 さばきが神の家から始まる時が来ているからです。それが、まず私たちから始まるとすれば、神の福音に従わない者たちの結末はどうなるのでしょうか。」生きておられる主が、その栄光をもって来られる時に、ご自分の家にあるものを清め、それから世を裁かれます。2-3 章が、教会に対する裁き、あるいは評価であり、4 章以降で、世に対する裁き、罪定めがあります。

### 1A 教会の真ん中におられる方 1

<sup>1</sup> エペソにある教会の御使いに書き送れ。『右手に七つの星を握る方、七つの金の燭台の間を歩く方が、こう言われる—。

エペソは、主がヨハネに語られている、パトモス島から最も近いところにある町です。港湾都市で

す。「アジアの中心」と呼ばれたほど、ローマ帝国の中で突出した町でした。アジアからの商品がここに来て、ローマに渡ります。逆も同じです。ですから、パウロがここでみことばを語った時に、アジア中にみことばが広がったことが、使徒の働きに書かれています。

ゆえに、裕福で、栄えていました。使徒の働き 19 章で、大騒動が起こった劇場がありましたが、二万五千人を収容することのできる大きなものです。ですから、エペソ人への手紙には、豊かさがテーマとなっています。それは物質的な豊かさではなく霊的なものです。あなたがたは、キリストにあって、天にあるすべての霊的祝福をもって祝福されていると、パウロは強調したのでした。

エペソは、ローマ帝国の他の大都市にもある、異教的な要素が多分にありました。アルテミスという豊穡の女神が祀られている「アルテミス神殿」は、世界の七不思議の中に入られています。数多くの柱があり、そして奥にアルテミスが祀られています。数多くの乳房がぶらさがっているグロテスクなものです。淫行が当たり前のように起こっていました。そこにいる女祭司は売春婦でした。アルテミスのお祭りでは乱痴気騒ぎが起こります。そして、その周囲で商売が行われています。パウロがそこで宣教していた時、信じた人々は偶像を捨てたので、アルテミス神殿の銀細工人が商売あがったりで、騒動を起こしましたね。そんな中に、キリストの教会が生まれたのです。

そしてローマには、皇帝礼拝があります。ローマ帝国を一つに治めるために、その統合の象徴として皇帝を主として、救い主として信じる信仰を養っていました。アゴラに入る所には、皇帝を神として献げるための香を焚く場があり、そこで焼香を済ませてから中に入ることができます。これまた、キリスト者にとっては大きな試練だったでしょう。

しかし、キリスト者はそんななかで信仰と希望によって支えられ、またキリストの愛に満たされて世に対して、証しを立てていました。例えば、ローマには悪しき習慣がありました。ごみ収集所に、生まれたばかりの赤ん坊を日差しに晒して、そのまま捨てて良いという法律がありました。特に、アルテミス神殿で商売をしている巫女たちは望まぬ妊娠をしたら、ここに赤ん坊を捨てていました。しかし、そんなところにやってきて赤ん坊を救い出していたのは、キリスト者たちです。

また、悪霊を呼び寄せる場所があり、オカルトが流行っていました。ですから、パウロが福音宣教をしていた時に、悪霊追い出しの記述が、使徒 19 章にあります。そして、魔術を行っていた者たちが書物を焼き捨てたことも書かれています。それでエペソの教会に対してのパウロの手紙には、6 章に、霊の戦いとして、悪霊どもが空中にいることを生々しく描いているのです。

そのエペソに、強い教会が建て上げられたことは、使徒の働きに書かれています。初めに、パウロが短期でここを訪問し、福音宣教をしました。そしてアポロが来て、そのアポロをアクラとプリスキラが教えました。そしてパウロが、アポロによって教えられた弟子に出くわし、彼らがイエスの

御名によってバプテスマを受け、また聖霊の賜物も受けました。そして驚くべき業が行なわれます。

パウロは、後にエルサレムに行く途中で、その長老たちを呼び寄せ、最後の言葉を語りました。「使徒 20:28-30 あなたがたは自分自身と群れの全体に気を配りなさい。神がご自分の血をもって買い取られた神の教会を牧させるために、聖霊はあなたがたを群れの監督にお立てになったのです。29 私は知っています。私が去った後、狂暴な狼があなたがたの中に入り込んで来て、容赦なく群れを荒らし回ります。30 また、あなたがた自身の中からも、いろいろと曲がったことを語って、弟子たちを自分のほうに引き込もうとする者たちが起こってくるでしょう。」

このように、偽教師たちが教会から出てくるということを彼は予告しました。果たして、そうした者たちがやってきて大変なことになっていたことが、次の牧会者テモテが対処したことで分かります。テモテへの手紙第一と第二には、そうした悪い者たちに対処している姿を見ます。

ですからエペソにある教会は、パウロが教会開拓をして、そしてテモテに引き継がれたところがあります。そしてさらに、使徒ヨハネに任されたであろうと思われます。つまり、パウロ、テモテ、そしてヨハネによって牧会を受けた、筋金入りの教会でした。信者たちは、大きな試練や誘惑、信仰の戦いを内外に受けていたけれども、それにまさる励ましと健全な教えを、しっかりと持っていた教会だったのです。そのような中で、主が与えられた言葉です。

使徒ヨハネに栄光の姿でイエス様が現れてくださいましたが、今、1 節で、その一部をもってご自身を示しておられます。一つは、「右手に七つの星を握る方」です。そして、「七つの金の燭台の間を歩く方」です。右手に星を握っているということは、主イエスご自身が、エペソの教会を支配しておられるということです。ご自身の御手の中に権威を持って入れておられるということです。そして、燭台の間にいるということは、主がエペソの教会の真ん中におられるということです。

## **2A 労苦と忍耐 2-3**

### **1B 偽使徒への対峙 2**

<sup>2a</sup> わたしは、あなたの行い、あなたの労苦と忍耐を知っている。

主は、初めに慰め、励ましています。「知っている」という言葉が、そうです。他のだれもが認めていなくとも、主イエスご自身が知っています。行いを、その労苦と忍耐を知っておられます。「労苦」とは、「まさに力尽きて倒れんとするばかりの働き」という意味のギリシア語が使われています。そして、「忍耐」は、「不動の持久力」を意味します。いろいろな困難があっても、それをしっかり受けとめて、そこにある恵みによって強くされています。

<sup>2b</sup> また、あなたが悪者たちに我慢がならず、使徒と自称しているが実はそうでない者たちを試して、

彼らを偽り者だと見抜いたことも知っている。

先ほどお話ししましたように、エペソの教会には狼たちが入っていました。パウロが、前もって警告し、はたして、テモテがそこを監督している時、悪い者たちが言い争っていました。律法について熱心なようで、空想話にそれていました。信仰から離れ、復活はすでに起こったと言った者たちもいました。悪霊の教えとして、結婚を禁じたり、食物を経つことを教えている者たちもいました。敬虔を利得の手段に使っている者たちもいます。そして、女たちをたぶらかして、彼女たちは様々な欲望に引き回されて行きました。彼らは、これらとんでもない諸問題に対して、なすがままにはしなかったのです。「悪者たちに我慢がなら」なかった、と、主は評価しておられます。

そして、偽使徒たちもいて、彼らは試して、偽り者だと見抜くことができました。使徒と名乗る者たちを、いかに強く対処できるかは、相当なエネルギーを使わなければならなかったことでしょう。ヨハネの三つの手紙にも、そうした偽教師たちがいて、反キリストとヨハネが呼んでいました。パウロが、コリントの教会で、悪い働き人のために一部の人が影響されて、パウロに心を閉ざしていたという流れを見ることができます。その中で、パウロは、はっきりと述べています。「Ⅱコリ11:13-15 こういう者たちは偽使徒、人を欺く働き人であり、キリストの使徒に変装しているのです。しかし、驚くには及びません。サタンでさえ光の御使いに変装します。ですから、サタンのしもべどもが義のしもべに変装したとしても、大したことはありません。彼らの最後は、その行いにふさわしいものとなるでしょう。」正義の使者として変装するので、見分けるのが困難なのです。

### 2B 疲れ果てない忍耐 3

<sup>3</sup>あなたはよく忍耐して、わたしの名のために耐え忍び、疲れ果てなかった。

悪に対して、決して妥協しないことは、並大抵のことではありません。忍耐することは、骨が折れます。短い期間であれば我慢できても、長引けば疲れが生じます。しかし、ヘブル人への手紙によれば、最後まで、初めの確信を保っているからこそ、キリストにあずかることができるのです。

「わたしの名のために耐え忍び」とありますが、イエスの名を語り、証しする時に、反対にあいませ。ペテロが、だれの名によって、この足なえの男を立たせたのか？と、サンヘドリンで尋問を受けました。ペテロは聖霊に満たされて、「使徒 4:10 あなたがたが十字架につけ、神が死者の中からよみがえらせたナザレ人イエス・キリストの名によることです。」「4:12 この方以外には、だれによっても救いはありません。天の下でこの御名のほかに、私たちが救われるべき名は人間に与えられていないからです。」と、大胆に宣言しました。彼らの前で、イエスは死刑に定められたのです。自分がそうであっても、全くおかしくありません。どれだけ勇気でしょうか！

そして、エペソの人たちは、「疲れ果て」なかったのです。ヘブル人への手紙で、著者が、疲れ果

てないように戒めている箇所があります。「12:3-4 あなたがたは、罪人たちの、ご自分に対するこのような反抗を耐え忍ばれた方のことを考えなさい。あなたがたの心が元気を失い、疲れ果ててしまわないようにするためです。あなたがたは、罪と戦って、まだ血を流すまで抵抗したことはありません。」罪と戦うのは、胆力がいります。しかし、最後まで反抗に耐え忍ばれた方、イエスのことを思いなさいと勧めているのです。元気を失って、疲れ果てることがないようにするためです。

### **3A 初めの愛 4-6**

主は、このように献身や忍耐に対して、彼らを評価しておられます。しかし、エペソの教会には大きな問題がありました。なかなか目に見えない霊的な問題です。

#### **1B 愛による労苦 4**

<sup>4</sup>けれども、あなたには責めるべきことがある。あなたは初めの愛から離れてしまった。

これまで主がほめてこられた、行い、労苦や忍耐。悪者には妥協しないこと、偽使徒の見分けなど、これらすべては、キリストにある神の愛から来なければいけないものです。ところが、最も肝心の、キリストの愛がどこかに行ってしまった状態で、耐え忍んでいたということです。これでは、単なる義務感、我慢に陥っているのであり、キリスト教会がキリスト教会でなくなってしまう。

エペソの教会の人々が、愛の奉仕をしていたことを先にお話ししました。パウロが、手紙の中でも祈り求めていることでした。「エペ 3:17-19 信仰によって、あなたがたの心のうちにキリストを住まわせてくださいますように。そして、愛に根ざし、愛に基礎を置いているあなたがたが、18 すべての聖徒たちとともに、その広さ、長さ、高さ、深さがどれほどであるかを理解する力を持つようになり、19 人知をはるかに超えたキリストの愛を知ることができますように。そのようにして、神の満ちあふれる豊かさにまで、あなたがたが満たされますように。」

キリストの愛とは何でしょうか？「エペ 5:2 また、愛のうちに歩みなさい。キリストも私たちを愛して、私たちのために、ご自分を神へのささげ物、またいけにえとし、芳ばしい香りを献げてくださいました。」キリストが、私たちの罪のための献げ物になったところに、愛が示されています。

パウロは、「Ⅱコリ 5:14 キリストの愛が私たちを捕らえているからです。」と言いました。宣教の原動力は、この愛によるものです。そして、エペソ書に戻ると、妻が夫に従うのは、あくまでも夫が自分自身のように妻を愛するからであり、それは、キリストが教会のためにご自身を献げられたからだ、と言っています(5:25)。愛がなければ、自分自身を献げ、従わせることなどできないからです。それでイエスは、ご自分を愛することと、命令を守ることは切り離せないことを語られました。「ヨハ 14:15 もしわたしを愛しているなら、あなたがたはわたしの戒めを守るはずです。」

ところが、その肝心な愛から、離れてしまったと、主は彼らを叱責しておられます。愛がなければ、どんな知識も、献身も、無に等しいとパウロが話したのを思い出す必要があります( I コリ13章)。

## 2B 初めの行い 5

<sup>5a</sup> だから、どこから落ちたのか思い起こし、悔い改めて初めの行いをしなさい。

主は、「初めの行い」に戻ることを命じておられます。それは、愛によって労苦することです。同じ労苦でも、義務的なもの、ただ我慢して労苦するのではなく、愛から始まる労苦です。( I テサ 1:3 参照)。形としては行いがあり、労苦があり、忍耐がありました。しかし、それが機械的に動いていたのが、エペソの教会だったのです。

愛というのは、優先順位に深く関わります。自分が何を選び、何を退けるかを見れば、どちらを愛しているのかが自ずと見えてきます。

ペテロのことを思い出します。彼は、主が復活されたのを見ました。この方がガリラヤに行きなさいと命じておられたのを思い起こし、そこで主を待っていました。しかし、ペテロはそこで漁を始めたのです。「ヨハ 21:3 シモン・ペテロが彼らに「私は漁に行く」と言った。すると、彼らは「私たちも一緒に行く」と言った。彼らは出て行って、小舟に乗り込んだが、その夜は何も捕れなかった。」そして、主が岸边におられました。そして、舟の右側に網を降ろしなさいと言われたら、大漁でした。それでヨハネが、「主だ」と言いました。ペテロは、そのまま湖に飛び込み泳ぎました。彼らは、主と共に食事をします。そして主がペテロに言われました、「21:15 ヨハネの子シモン。あなたは、この人たちが愛する以上に、わたしを愛していますか。」ここの「この人たち」は、「これら」とも訳すことができます。そうすると、そこに捕れた魚が 153 匹もいました。これらよりも、わたしを愛していますか？と問われたのです。彼は、一度、網を置いて、主に従いました。けれども、自分の漁に戻りました。また、主に引き戻されました。主が他のものにとって代わりました。初めの愛から離れました。

イエスの愛された姉妹、マルタとマリアについても同じことが言えます。「ルカ 10:40-41 ところが、マルタはいろいろなもてなしのために心が落ち着かず、みもとに来て言った。「主よ。私の姉妹が私だけにもてなしをさせているのを、何ともお思いにならないのですか。私の手伝いをするように、おっしゃってください。」主は答えられた。「マルタ、マルタ、あなたはいろいろなことを思い煩って、心を乱しています。しかし、必要なことは一つだけです。マリアはその良いほうを選びました。それが彼女から取り上げられることはありません。」マルタも、イエスへの愛に表れとして、おもてなしをしていましたが、いつの間にかそれ自体が目的となり、初めの愛を置き去りにしてしまいました。

ですから、初めの行い、すなわち、愛による行いに戻ります。そのためには、「どこから落ちたのか思い起こし、悔い改め」なさいと言われていました。悔い改めるとは、思い直すことです。思いを変

えることです。そのためには、まず、どこから落ちたかを思い起こす必要があります。もし、どこから落ちたのか思い起こさないのであれば、同じことを繰り返してしまいます。自分の罪、過ちを思い出さなければ、やり直しますといっても、何をやり直すのか分からなくなります。

それは、「キリストの愛から始まらないで、問題や悪に対峙していた」というところで、落ちていました。すべては、キリストの愛から始まります。どんな労苦も忍耐も、どんな行いも、キリストの愛から始まります。だから、聖餐式は重要です。イエスのからだを覚え、流された血を思い起こすのです。それなしに、偽教師がこんなことをしているといって戦っているのは、元も子もないのです。

カルバリーチャペルの牧者の会議が、かつて、教会の中にはびこっている、偽りの教え、教えの風について取り扱っていました。けれども、何年か経って基本に戻りました。何かに反対しているということよりも、何を信じているのか？に重きを置いたのです。偽物を暴くことも大事ですが、それよりも、本物がなにかを追求することの方が大事です。私たちにとって、本物とはキリストのことであり、この方の示された愛です。

<sup>5b</sup> そうせず、悔い改めないなら、わたしはあなたのところに行って、あなたの燭台をその場所から取り除く。

悔い改めない時には、主が、燭台をその場所から除く、すなわち光を取り除かれます。これは、恐ろしいことですが、初めの愛から離れた教会は、もう教会ではないのです。愛こそが、キリストの教会の最も大きな特徴であり、愛がなければ、教会が教会でなくなります。今、エペソに行けば、その大きな町の遺跡は世界遺産になっていますが、稼働している教会はありません。私たちが教会として光っているのは、そこに愛があるからです。愛がなければ、教会そのものが無くなってしまってしまうのです。

### 3B ニコライ派への憎しみ 6

<sup>6</sup> しかし、あなたにはこのことがある。あなたはニコライ派の人々の行いを憎んでいる。わたしもそれを憎んでいる。

ニコライ派であります、この箇所と次のペルガモンの教会にしか出てこない言葉です。ペルガモンの教会の教会では、ニコライ派が「バラムの教え」と共に語られていることがあります。偶像礼拝と淫らな行いが書かれています。ですので、こうした異教的なことをしていてもよいのだ、とする、容認する教えがニコライ派であったと考えられます。

また、ニコライ派の名前は、「征服」と「人々」の合成語です。霊的な階級を付けていたのではないかとされます。グノーシス的な教えです。霊知を誇り、霊的な階級を付け、知っている者と、

そうでない者を分けます。しかしヨハネはきっちりと、「私ヨハネは、あなたがたの兄弟であり」と言いました。キリストのからだの一部であり、同じ仲間とみなしました。自分を他の信者から切り離し、自分は知識を持っていると誇ることは、反キリストであるとヨハネは第一の手紙で断言しています。

#### **4A 勝利ある者 7**

<sup>7</sup> 耳のある者は、御霊が諸教会に告げることを聞きなさい。勝利を得る者には、わたしはいのちの木から食べることを許す。それは神のパラダイスにある。』

主は、七つの教会全てに「御霊が諸教会に告げることを聞きなさい。」と言われていました。つまり、エペソだけでなく全世界の教会への言葉です。それから、「勝利を得る者」の約束も、それぞれの教会に与えておられます。勝利を得る者とは、一部の優れた聖徒たちだけのものではなく、第一ヨハネにあるように、イエスを御子と信じる信仰こそが、世に打ち勝つ勝利なのです。悪魔やその手下どもは、どんなに害を加えようとも、主が打ち滅ぼしてくださり御国を受け継ぐのです。

そして約束は、21章にある天のエルサレム、または20章の千年間のキリストとの統治のどちらかが、七つの教会に与えられています。これが、ヨハネが語った御国です。私たちは、御国に入るように召されています。ここでは、天のエルサレムにある、生ける川のそばに植えられている、いのちの木です。これが、永遠のいのちであります。

いかがでしょうか、この方の名のゆえに、悪に対峙しなければいけません。しかし、初めに持って来ないといけないものを、いつも初めに持ってきます。キリストの愛です。私は、海外の旅に出る時にしばしばしてしまうのは、パスポートを入れ忘れることです。他のいろんなものを入れるのですが、まさかパスポートは忘れないだろうと思って、後にしておくのです。寝床に入ってから、パスポートを入れていなかったことに気づき、起き上がったことがあります。このように、私たちは何かに取り組んでいるうちに、最も大切なものを置き去りにしてしまいます。初めのものを、初めに持ってきて、思い起こしましょう。